

S-Netの自然史標本データ形式（S-Net形式）

S-Netのデータ形式は、Darwin Coreに準拠しているGBIFのデータ形式をもとにしているため、S-Net用に整備した標本データは、GBIFのデータ形式と互換性をもっています。

1. S-Net形式の概要

S-Netのデータ形式は、GBIFのデータ形式をもとに、日本国内で利用しやすいよう、「国」と「国（日本語）」のように、各項目を日本語でも入力できるようにした構成になっています。

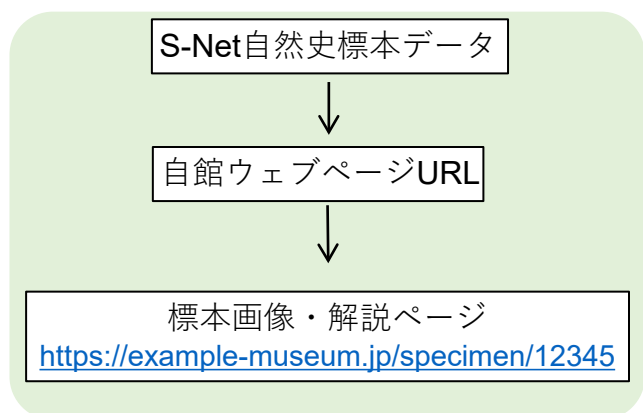
2. S-Netのデータ項目

S-Net形式には、150項目があります。これを利用して、標本の管理番号や「なにが・いつ・どこにいたのか」という基本的な情報から、雌雄・生活史型・採集方法などの追加的な情報、化石やタイプ標本に固有の情報までをカバーしています。ただし、入力が必要な項目はごくわずかですので、すべての項目をもれなく入力する必要はありません。

各機関が独自に作成・管理している自然史標本データは、**データ変換ツール**を利用することで、簡単にS-Net形式へ変換できます。
『データ変換ツールマニュアル編』を参照してください。

3. 画像・ウェブページとの連携

S-Netでは画像ファイルそのものは登録できませんが、自館で公開しているウェブページや画像へのリンクを設定できます。今後、各画像の詳細なデータ（タイトル、著作権者、ライセンスなど）を入力する機能を整備していく予定です。



ウェブページへリンクする際には、S-Netのバナーもご利用ください。



4. データ作成時の注意点

①入力形式を統一する

→データ項目ごとに、S-Net項目一覧（15－20ページ）参照し、入力形式や記載方法を確認してください。

②データ作成のポイント

→Excel等で自館データを作成する際は、データ変換ツール（マニュアル編）のマッピング利用機能とS-Netの項目名と一致する項目名を使用してください。

③入力に迷ったとき

→各項目の入力方法は、S-Net項目一覧（15－20ページ）の「値（Value）」欄を参照してください。

④必須項目について

→必須項目に入力できない場合は、「-（半角ハイフン）」または「ー（全角ハイフン）」を入力してください。

※詳細は「マニュアル編」を参照してください